

ネズミと接触した者が8例、汚染した井戸水から感染したと考えられた例が1例あった(表37)。

ク) 発生上の特徴

患者報告地は東京都が8例、大阪府が3例と過半数を占め、都市部での発生が多い傾向があった。患者の職業は農業が4名であったが、調理師や飲食店員などネズミが出没する環境で働く者が8名いた(表35, 37)。

4-16. 肝蛭症

ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004年までに肝蛭症の文献は12件検索され、合計22例の症例が報告されていた。年度別では1996年に4件の文献が刊行され、13症例が報告されたが、1999, 2000, 2003, 2004年は報告文献数がゼロであり、その他の年も文献数は1～2件、報告症例数は1～3例と少なかった(図35)。

イ) 患者の男女別年齢分布

報告された症例の年齢分布では16歳の女子例を除いて、すべて中高齢者であり、70歳以上の患者が最も多く、最高齢者は81歳であった。男女比は9:13でやや女性患者が多かった(図36)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

上腹部痛と心窩部痛が22例中13例と最も多く、発熱が6例でこれに次いだ(表37)。初診時の主な所見では、好酸球増多が14件と最多で、CT検査で肝臓に嚢胞、腫瘤、膿瘍などが認められた例が12例あった(表38)。

エ) 診断に要した主な検査

肝蛭症の診断はOucherlony法による血清診断が14例(陽性13例、陰性1例)で実施されていた。診断が困難で開腹手術を受けた例、胆管癌を否定できずに肝切除を受けた例が1例ずつあった。また、生検などの組織診断を受けた例が4例あった(表

39)。

カ) 病原体

肝蛭の虫体ないし虫卵が検出できた例は6例で、ERCPで虫体を確認できた例、十二指腸液中、胆汁中に虫卵を検出できた例が2例ずつあった(表40)。

キ) 治療及び予後

治療に用いて薬剤としては、プラジカンテル単独が10例、ピチオノール単独が2例、上記2剤の併用例が2例であった。他にプラジカンテルからピチオノールに変更した例が1例、プラジカンテルが無効でトリクラベンダゾールを投与した例が1例あった(表39)。予後では、改善した患者が12例、改善不十分例が1例あったが、その他の9例では記載がなかった(表40)。

ク) 感染機会

感染機会が判明した15例中、牛糞を肥料に使用していた者が8例と最も多く、ウシ飼育者が3例、ウシ肝生食が2例、ミョウガ生食が2例であった(表40)。

ケ) 発生上の特徴

患者の多くは農業、酪農業関係者であった。

4-17. E型肝炎

ア) 年別文献数及び報告症例数

E型肝炎患者の症例報告文献数は10年間で11件、報告患者数は30例検索できた。報告年は1997年に1件、1症例あったが、その後しばらく報告がなく、2002年から2004年は続けて報告があった。特に、2003年には文献数6件、報告症例数23例と集中的な報告がみられた(図37)。

イ) 患者の男女別年齢分布

報告された患者の年齢分布では50歳代が11例で全体の1/3以上を占め、若年者に患者が少なく、中高年者の患者が多く診られた。患者の男女比は22:8で、男性が女性の約2.8倍多かった(図38)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では倦怠感が最も多く 30 例中 23 例が訴えた。次いで食欲不振が 16 例、黄疸が 10 例であった (表 41)。初診時の主要所見では黄疸が 12 例で最多であった (表 41)。

エ) 診断に要した主な検査

E 型肝炎の診断には IgM 抗体測定とウイルス RNA の証明がそれぞれ 8 例、4 例で用いられていた (表 42)。

カ) 治療及び予後

劇症肝炎の経過をとった例が 2 例、重症化した例が 2 例報告されていた。予後が記載されていない 3 例を除いて、24 例が回復ないし改善したが、死亡例が 3 例あった (表 42)。

キ) 感染機会

E 型肝炎の感染機会としては、動物の内臓節食歴のあった患者が 10 例あった。海外渡航歴のあった患者が 3 例いたが、渡航先は欧米であり、渡航先での感染は考えにくかった (表 43)。

ク) 発生上の特徴

報告された症例 30 例中 18 例が北海道で発生しており、全症例の 6 割を占めた (表 43)。

4-18. 真菌症

ア) 年別文献数及び報告症例数

真菌症の報告文献数は 10 年間で 10 件、報告患者数は 18 例検索できた。基礎疾患の悪化に伴って合併した真菌症は極力除外したため、報告件数が少なくなった。報告は 1999 年に 1 件、2001～2003 年に 3 件ずつあったが、報告症例数は 2003 年が 8 例と最も多かった (図 39)。

イ) 患者の男女別年齢分布

真菌症患者は幼児にも中高年にもみられた。男女比は 8 : 10 でほとんど差がなかった (図 40)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は、紅斑、皮疹、脱毛などが多く、初診時の主要所見としても、紅斑が最も多かった (表 44)。

エ) 診断に要した主な検査

真菌症の診断には、真菌の培養、検鏡が用いられていたが、PCR を実施した例も 1 例あった (表 45)。診断名では白癬が 10 例と最多で、頭部白癬が重症化したケルスス禿瘡も 3 例報告されていた (表 45)。

カ) 病原体

病原体としては、*Microsporium canis* が 6 例で全体の 1/3 を占めた。*Trichophyton mentagrophytes* が 4 例でこれに次いだ (表 46)。ケルスス禿瘡の 3 例のうちネコから感染した 2 例の病原体は *M. canis* であったが、モルモットから感染した 1 例の病原体は *T. mentagrophytes* であった。

キ) 治療及び予後

重症例を含めて 7 例で抗真菌薬の外用に加えて、イトラコナゾールの内服が併用されていた。フルコナゾール、グリセオフルビン、テルビナフィンの内服した症例も少数みられた (表 45)。半数以上で後遺症無く回復していたが、脱毛斑、脱色素斑、色素沈着を残した例もあった (表 46)。

ク) 感染源

ネコからの感染者が 7 例と最多で、家族内感染も 3 例みられた (表 46)。

4-19. ジアルジア症 (ランブル鞭毛虫症)

ア) 年別文献数及び報告症例数

2002 年に 2 件、1997、2000、2003 年に各 1 件、合計 5 件の文献が検索され、これらに 1 例ずつ、合計 5 例の症例が記載されていた。

イ) 患者の男女別年齢分布

年齢分布では、10 歳代後半、40、50、60、70 歳代が各 1 例で、男女比は 2 : 3 であった。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は下痢が3例で、1例は糖尿病性末梢神経障害のために、他の1例は大腸ポリープの経過観察のため受診した際に発見された。

エ) 治療及び予後

全例にニトロメダゾールが投与され、後遺症なく回復した。

カ) 病原体

1例は便から、1例は腸液から *Giardia lamblia* が検出されたが、2例は腸粘膜の生検で、他の1例はERPCで脾臓に *Giardia lamblia* が証明された。

ク) 感染機会

5例とも感染源も感染経路も不明であったが、1例では性媒介感染が疑われた。

4-20. クリプトスポリジウム症

ア) 年別文献数及び報告症例数

2002年に2件、1998、2004年に各1件の文献が検索され、合計6例の症例が記載されていた。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢は10歳代後半と30歳代が1例、20歳代が4例であり、全例が男性であった。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は水様下痢が6例、腹痛、食欲不振が各2例であった。主要症状は水様下痢（6例）と腹部圧痛（3例）であった。

エ) 診断に要した主な検査

4例は便から *Cryptosporidium parvum* のオーシストが検出され、1例は大腸内視鏡検査で、他の1例は便中抗原検査で診断がなされた。

カ) 治療及び予後

全例で補液がなされ、2例で止痢剤、1例でクラリスロマイシンが投与されていた。

ク) 感染源

2例は汚染された水道水が感染源であつ

たが、他の4例では感染源が不明であった。

4-21. 日本脳炎

ア) 年別文献数及び報告症例数

1998、1999、2000、2001年に各1例の文献が検索され、それぞれ1症例、計4症例が記載されていた。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢は9歳未満、40、50、60歳代が各1例であった。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は発熱、意識障害、痙攣、四肢の鈍麻であり、初診時の主な症状では項部硬直、意識障害であった。

エ) 診断に要した主な検査と予後

HI抗体検査で診断された。死亡例はなかったが、3例で後遺症がみられた。

カ) 感染機会

感染源、感染経路は全例で不明であった。

4-22. 炭疽、鼠咬症、ブルセラ症

ア) 炭疽

1995年と2002年に炭疽の文献が各1件検索され、計2例の症例が記載されていた。症例は2例とも60歳代の男性で、1例の主訴は頭部の痂皮と痒み、他の1例は前彎の腫脹、発熱、頭痛であった。2例とも皮膚炭疽と診断され、後遺症なく回復した。

イ) 鼠咬症

2001年に1件の文献があり、50歳代の男性症例が報告されていた。主訴は鼻出血、初診時には皮下出血、血小板減少、蛋白尿、尿潜血がみられた。抗菌剤投与と血漿交換による治療を受けたが、救命できなかった。病原体は *Streptobacillus moniliformis* であった。

ウ) ブルセラ症

1996年に海外渡航歴のない国内発生例1症例が報告された。患者は30歳代の外科医で、主訴は微熱、乾性咳嗽、胸痛であ

った。PCR, 肺組織培養で *Brucella abortus* によるブルセラ症と診断された。ドキシサイクリン, ストレプトマイシン, リファンピシンの併用により回復した。感染経路は不明であった。

5. 文献検索で把握できた症例数と発生動向調査による届出例数との比較。

感染症法に基づいて 1999 年から全例報告がなされている疾患と今回文献検索の対象とした疾患の間で共通している 12 疾患について, 2000 ~ 2004 年に把握された患者数を比較した。炭疽が届出数はゼロ件であったものの, 文献上では 1 例検索できた。しかし, 炭疽以外の疾患ではすべて届出患者数が文献上記載された症例数をはるかに上回っており, 文献上の症例数は, 届出患者数が多い疾患では届出数の 1 % 前後, 届出患者数が少ない疾患でも 30 % 前後しか把握できていなかった (表 47)。

D. 考察

発生動向が十分には知られていない動物由来感染症のわが国における発生状況を知る目的で, 動物由来感染症症例報告文献を検索して検出できた症例について年別報告文献数, 症例数, 男女別患者年齢分布, 患者の主訴, 初診時の主要症状, 検査法, 治療, 病原体, 予後, 感染機会, 動物飼育歴, 食物嗜好などを分析した。

検査法, 病原体, 治療法などはこれまで成書に記載された内容と大差のない結果であったが, 患者の年齢分布, 男女比, 感染機会, 発生地などに関しては, 猫ひっかき病, パスツレラ症, トキソプラズマ症では女性患者が多く, E 型肝炎, レプトスピラ症では男性患者が圧倒的に多いこと, 猫ひっかき病では従来言われているより中高年の患者が多いこと, 猫ひっかき病の発生が北海道, 東北, 北陸地方に少ないこと, 先

天性トキソプラズマ症患者の中に母親が妊娠中に獣肉を生食したことが感染源と考えられる例があったことなど, 新しい情報を得ることができた。

文献のデータベースを利用して動物由来感染症の発生動向を知るという手法には, 学術誌に掲載される症例は, 発生した全症例の一部にすぎないため, 全症例の一部しか把握できないという重大な欠陥はある。しかし, その時々注目された疾患ないしきわめてまれな疾患は症例報告として記録されていると考えられるので, 個々の症例報告を検討することにより, 特定の動物由来感染症が国内のどの地域で多発するか, 一般的なあるいはまれな感染経路はどのようなものか, 確定診断するうえで何が有用な検査法であるかなど, 通常発生動向調査では得られない情報をも入手することが可能である。

感染症法が改正されて, 届出対象となる動物由来感染症の種類は増えつつある。しかし, 猫ひっかき病, パスツレラ症, トキソカラ症など未だ届出の対象となっていない動物由来感染症に関しては文献検索の手法による以外に発生状況を知る手段がない。また, 届出対象の疾患であっても, 患者数や発生地域は把握できるものの, 診断法や治療法に関してはまったく情報が得られない。したがって, 動物由来感染症症例の詳細を知る手段として, 文献検索による手法は今後もその意義を失うことはないと考えられる。

今後は文献検索によって得られた症例報告の分析結果を, 症例報告本体とともに CD-ROM に収載して, 第一線の医療機関に配布し, 動物由来感染症診療に資する予定である。

E. 結論

文献のデータベースを利用して動物由来

感染症の発生動向を知るという手法には、欠陥はあるものの、通常の発生動向調査では得られない情報、つまり感染経路、診断法などに関する情報も入手することが可能であり、こうした情報を集積・分析することにより国内における動物由来感染症の実態を明らかにするとともに、さらには動物由来感染症の診断を容易にする手段を提供できる。

F. 健康危険情報

特記すべきものなし。

G. 研究発表

未発表

H. 知的財産権の出願・登録状況

予定なし。

表 1. 三次調査で検出された疾患別文献数

感染症	件数	感染症	件数
猫ひっかき病	65	発疹熱	0
つつが虫病	41	Bウイルス感染症	0
エルシニア症	38	サル痘	0
糞線虫症	35	ペスト	0
リステリア症	34	腎症候性出血熱	0
パスツレラ症	34	狂犬病	0
トキソプラズマ症	33	狂犬病関連リッサウイルス症	0
トキソカラ症	31	リンパ球性脈絡髄膜炎	0
オウム病	27	トリパノソーマ症	0
ライム病	26	発疹チフス	0
クリプトコッカス症	22	回帰熱	0
Q熱	18	野兎病	0
日本紅斑熱	17	類丹毒	0
エキノкокクス症	15	アライグマ回虫症	0
レプトスピラ症	15		
肝蛭症	12		
E型肝炎	11		
真菌症	10		
ジアルジア症	5		
クリプトスポリジウム症	5		
日本脳炎	4		
炭疽	2		
鼠咬症	1		
ブルセラ症	1		
合計	502		

表 2. 三次調査で検出された疾患別症例数

感染症	例数	感染症	例数
猫ひっかき病	96	発疹熱	0
エルシニア症	58	Bウイルス感染症	0
つつが虫病	57	サル痘	0
パスツレラ症	50	ペスト	0
トキソカラ症	42	腎症候性出血熱	0
リステリア症	40	狂犬病	0
トキソプラズマ症	39	狂犬病関連リッサウイルス症	0
オウム病	39	リンパ球性脈絡髄膜炎	0
糞線虫症	38	トリパノソーマ症	0
ライム病	34	発疹チフス	0
Q熱	30	回帰熱	0
E型肝炎	30	野兎病	0
日本紅斑熱	28	類丹毒	0
エキノкокクス症	26	アライグマ回虫症	0
クリプトコッカス症	22		
肝蛭症	22		
真菌症	18		
レプトスピラ症	18		
クリプトスポリジウム症	8		
ジアルジア症	5		
日本脳炎	4		
炭疽	2		
鼠咬症	1		
ブルセラ症	1		
合計	708		

表3. 猫ひっかき病患者の主訴（左），主要症状（中央），患者発生地域（右）

主訴	例数	主要症状	例数	発生地	例数
皮下腫瘤・腫脹	41	発熱	16	九州	24
発熱	30	リンパ節腫脹	24	関東	20
リンパ節腫脹	19	皮下腫瘤・腫脹	38	中国	13
疼痛・圧痛	9	視力障害	12	四国	13
視力障害	7	意識障害	2	近畿	12
頭痛	7	顔面神経麻痺	1	中部	5
関節痛	6	咽頭発赤	2	東北	2
咳嗽	2	全身倦怠感	1	沖縄県	2
顔面神経麻痺	1	下痢・腹痛	1	北陸	0
開口障害	1	上肢の違和感	1	北海道	0
意識障害	1	合計	98	記載なし	5
腹痛	3			合計	96
下痢	3				
上肢脱力	1				
合計	131				

主要症状	例数
発熱のみ	8
視力障害のみ	7

表4. 猫ひっかき病患者の検査法（左），治療，予後（中央），病原体，感染機会（右）

検査法	例数	治療	例数	病原体	例数
抗体検査	51	抗菌薬のみ	27	<i>B. henselae</i>	58
生検，切除	29	抗菌薬+ステロイド	18	記載なし	34
MRI, CT	23	抗菌薬→中止	6	不明	4
超音波	5	ステロイドのみ	2	合計	95
PCR	2	外科的処置	11		
穿刺細胞診	2				

予後	例数
症状消失	65
軽快	14
視力低下	3
視野狭窄	1
再発	1
記載なし	12

感染機会	例数
ネコ飼育歴	61
ネコ接触歴	20
ネコ接触なし	2
イヌ接触歴	1
不明	3
記載なし	9

表5. つつが虫病患者の主訴（左），初診時主要症状（中央），主な検査法（右）

主訴	例数	主要症状	例数	検査法	例数
発熱	52	紅斑・発疹	45	IgG・IgM抗体	43
発疹・紅斑	26	発熱	43	IgM抗体	4
全身倦怠	11	リンパ節腫脹	26	IgG抗体	1
頭痛	8	DIC	8	FA, IF抗体	5
リンパ節腫脹	5	血小板減少	6	CF抗体	3
関節痛	3	呼吸困難・不全	4	PCR	12
食欲不振	2	間質性肺炎	4	Weil-Felix反応	13
排尿困難	2	項部硬直	3	骨髄穿刺	3
筋肉痛	2	肝機能障害	2	皮膚生検	1
呼吸困難	2	肝脾腫	1	リンパ節生検	1
意識障害	1	肝不全	1		
項部硬直	1	意識障害	1		
嘔気	1	失調性歩行	1		
歩行困難	1	無気肺	1		
下痢	1	黄疸	1		
合計	118	耳下腺腫脹	1		
		腎不全	1		
		合計	149		

表6. つつが虫病患者の病原体（左），治療薬（中央上），予後（中央下），感染源（右）

病原体	例数	治療薬	例数	感染源	例数
<i>O. tsutsugamush</i>	56	ミノマイシン	55	マダニ	51
Guilliam 型	9	ドキシサイクリン	2	刺し口なし	2
Karp 型	6	プレドニゾロン	1	記載なし	4
Fujita型	1	ステロイドパルス	1	合計	57
Kato型	1				
記載なし	1				
合計	57				

予後	例数
後遺症なく回復	55
死亡	2

表7. つつが虫病患者の感染機会（左），つつが虫病発生地（中央及び右）

感染機会	例数
山中	12
農作業	9
河川敷・土手	5
山麓	4
山菜採り	3
藪	3
森林	3
公園	2
ハイキング	2
ゴルフ場	1
陸上競技場	1
記載なし	12
合計	57

発生地	例数
広島県	10
神奈川県	5
千葉県	4
青森県	3
岩手県	3
栃木県	2
島根県	2
鳥取県	2
福島県	2
愛媛県	2
滋賀県	2
宮城県	2
長野県	2
宮崎県	2

発生地	例数
京都府	1
群馬県	1
石川県	1
岐阜県	1
高知県	1
兵庫県	1
岡山県	1
山梨県	1
茨城県	1
新潟県	1
伊豆諸島	1
中国地方	1
記載なし	2
合計	43

表 8. エルシニア症患者の主訴（左），初診時主要症状（中央），患者発生地（右）

主訴	例数	主要症状	例数	発生地	例数
発熱	41	右下腹部圧痛	25	岡山県	8
右下腹部痛	14	発熱	11	青森県	7
腹痛	13	紅斑	6	東京都	6
下痢	8	下痢	5	北海道	5
紅斑	4	頸部リンパ節腫大	3	山形県	5
嘔吐	3	嘔吐	2	沖縄県	4
発疹	3	咽頭発赤	2	香川県	3
間欠的腹痛	3	莓舌	2	秋田県	3
心窩部痛	3	腹部膨満	2	宮城県	2
食欲不振	2	腹部の腫瘍	2	岐阜県	2
浮腫	1	右下腹部痛	2	兵庫県	2
血尿	1	咳嗽	1	愛知県	1
乏尿	1	間欠的腹痛	1	熊本県	1
不機嫌	1	上腹部圧痛	1	富山県	1
関節炎	1	乏尿	1	石川県	1
全身倦怠感	1	血尿	1	埼玉県	1
合計	100	全身浮腫	1	福岡県	1
		項部硬直	1	京都府	1
		関節腫脹	1	大分県	1
		丘疹	1	島根県	1
		腱反射消失	1	長崎県	1
		合計	72	記載なし	1
				合計	58

表 9. エルシニア症患者の検査診断（左），病原体（中央），予後（右）

検査診断	例数	病原体	例数	予後	例数
便より菌分離	21	<i>Y. enterocolitica</i>	32	軽快・改善	47
抗体価上昇	18	<i>Y. pseudotuberculosis</i>	24	著変なし	1
膿から菌分離	7	不明	3	経過観察中	1
生検で菌分離	5			死亡	1
リンパ節から菌分離	5			記載なし	8
穿刺液から菌分離	1				
井戸水から菌分離	1				

表10. 糞線虫症患者の主訴（左），初診時主要症状（中央），患者発生地（右）

主訴	例数	主要症状	例数	発生地	例数
浮腫	7	浮腫	6	大阪府	8
下痢	6	腹部膨満	5	沖縄県	6
体重減少	6	腹部圧痛	4	長崎県	5
腹部膨満感	6	体重減少	3	東京都	3
呼吸困難	6	肺ラ音	3	宮崎県	2
食欲不振	5	紅斑	3	静岡県	2
嘔吐	4	低栄養	3	神奈川県	2
腹痛	3	発熱	2	愛知県	2
咳嗽	2	腹痛	2	福岡県	2
嚥下障害	2	呼吸困難	2	千葉県	1
全身倦怠感	2	紅皮症	2	埼玉県	1
掻痒感	2	季肋部痛	1	山梨県	1
発熱	2	腹部膨満感	1	三重県	1
易疲労感	1	発疹	1	鹿児島県	1
皮疹	1	イレウス	1	新潟県	1
紫斑	1	全身倦怠感	1	合計	38
胸部痛	1	貧血	1		
心窩部痛	1	掻痒感	1		
歩行困難	1	項部硬直	1		
耳鳴り	1	蛋白尿	1		
咯血	1	血尿	1		
喘息発作	1	胆嚢炎	1		
睪炎	1	睪炎	1		
意識障害	1	咯血	1		
合計	64	下痢	1		

表11. 糞線虫症患者の検査診断（左），治療薬（中央），予後（右）

検査診断	例数	治療薬	例数	予後	例数
便から虫，幼虫	18	チアベンダゾール	24	軽快・改善	28
腸生検で虫，幼虫	8	ミンテゾール	5	死亡	10
喀痰から虫，幼虫	3	アイバメクチン	5		
皮膚生検で虫	2	イベルメクチン	2		
BALで虫，幼虫	3	メベンダゾール	2		
胸水から幼虫	1	アルベンダゾール	1		
十二指腸液から虫	1				
抗体陽性	1				
記載なし	1				
合計	38				

表 12. リステリア症患者の主訴（左），初診時主要症状（中央），診断名及び治療法（右）

主訴	例数
発熱	26
意識障害	11
頭痛	8
チアノーゼ	7
無呼吸	4
呼吸障害	4
咳嗽	3
嘔吐	3
多呼吸	1
下痢	1
腹部膨満感	1
全身倦怠感	1
性器出血	1
四肢脱力	1
食欲減退	1
複視	1
歩行困難	1
尿失禁	1
咽頭痛	1
全身痙攣	1
合計	78

主要症状	例数
発熱	26
項部硬直	13
意識障害	11
呼吸障害	5
チアノーゼ	5
発疹	3
敗血症	3
無呼吸	2
肝腫大	2
切迫早産	2
胎児仮死	2
下痢	2
浮腫	1
肺ラ音	1
髄膜炎	1
筋緊張低下	1
多呼吸	1
喘鳴	1
四肢筋力低下	1
片麻痺	1
外転神経麻痺	1
眼球突出	1
脳浮腫	1
循環障害	1
頭痛	1
見当識障害	1
合計	90

診断名	例数
髄膜炎	25
敗血症	13
早発型リステリア症	3
切迫早産	2
脳膿瘍	2
肺炎	1
脳室炎	1
合計	47

治療	例数
抗菌薬	37
(ABPC+他剤)	23
(後にABPC単独)	8
(ABPC以外)	8
呼吸管理	7
交換輸血	3
ガンマグロブリン	3
抗痙攣剤	1
記載なし	3

表 13. リステリア症患者の病原体（左），予後（中央），感染経路（右）

病原体	例数
<i>L. monocytogenes</i>	38
4b型	12
1/2a型	4
1/2b型	1
1型	1
6型	1
菌陰性	1
不明	1

予後	例数
後遺症なく回復	34
回復*	2
死亡	4
合計	40

*水頭症 1 例，記載なし 1

感染経路	例数
胎内感染	9
産道感染	1
院内感染	2
院内感染疑い	2
経口感染疑い	10
不明	16

表 14. トキソプラズマ症患者の主な検査（左），治療（中央），予後（右）

主な検査	例数	治療	例数	予後	例数
IgG, IgM抗体*	27	アセチルスピロマイシン+他	11	改善	14
眼底検査	22	アセチルスピロマイシン単独	11	後遺症なく回復	11
CT検査	12	ピリメタミン+他剤	6	死亡	4
抗体	10	投薬せず	5	発達遅滞	3
リンパ節生検・摘出	9	抗癒薬剤	1	変化なし	2
PCR	8	ST合剤	1	再発・再燃	2
MRI検査	5	クラリスロマイシン	1	視力低下	1
筋生検	1	クリンダマイシン	1	片麻痺	1
Gaシンチ	1	交換輸血	1	視力低下	1
下垂体機能検査	1	記載なし	1	記載なし	1
		合計	39		

*母親の検査 1 例を含む

腫瘍・リンパ節腫脹	11
生検	4
摘出	5
悪性リンパ節疑	6

表 15. トキソプラズマ症患者の感染経路（左），患者発生地（右）

感染経路	例数	発生地	例数
胎内感染*	14	東京都	6
後天性感染	25	福岡県	4
牛ハチ刺し	2	栃木県	3
馬生肉	1	神奈川県	3
ヤギ肉	1	千葉県	3
イヌ飼育	4	長野県	2
ネコ飼育	3	鳥取県	2
学校飼育係	1	山口県	2
		宮城県	2
		沖縄県	2
		その他	10
		合計	39

*母親 2 例に妊娠中の
生肉食歴あり

表 16. トキソカラ症患者の主訴（左），初診時主要症状（中央），患者発生地（右）

主訴	例数	主要所見	例数	発生地	例数
視力低下・霧視	26	硝子体混濁・出	13	東京都	8
発熱・悪寒	7	網膜隆起性病変	11	大阪府	5
腹痛	3	乳頭浮腫	5	広島県	4
球結膜充血	2	網膜剥離	2	兵庫県	4
嘔気・嘔吐	2	乳頭部血管新生	1	栃木県	4
全身倦怠感	2	網膜下浸出性病	1	石川県	3
咳嗽	2	好酸球増多	14	奈良県	2
下肢の浮腫	1	全身倦怠感	4	愛媛県	2
下肢の結節	1	肝腫大	3	北海道	1
肝腫大	1	心嚢液貯留	2	福岡県	1
肝内腫瘤	1	肝内多発腫瘤	2	高知県	1
合計	48	胸水	1	青森県	1
		肺浸潤陰影	1	茨城県	1
		肺結節陰影	1	千葉県	1
		下肢の結節	1	愛知県	1
		下肢浮腫	1	京都府	1
		合計	63	長崎県	1
				宮崎県	1

表 17. トキソカラ症患者の病原体（左），治療（中央），飼育歴，食物嗜好（右）

病原体	例数	治療法	例数	飼育歴など	例数
イヌ回虫	29	ステロイド [®] 内服	20	イヌ飼育歴	8
トキソカラ	4	ステロイド [®] 静注	4	イヌ接触歴	3
ネコ回虫	1	ステロイド [®] 眼注	1	ネコ飼育歴	3
不明	3	フォスカネット眼注	1	不明	4
記載なし	5	眼科的手術	9	記載なし	24
		ジ [®] エチルカルバマジン	9		
		アルベンダゾール	4		
		チアベンダゾール	4		
		メベンダゾール	2		
				食嗜好	例数
				牛肝生食	9
				肉生食	4
				異味症	1

表18. パスツレラ症患者の主訴(左), 初診時主要症状(中央), 診断名及び発生地(右)

主訴	例数	主要症状	例数	診断名	例数
発赤・腫脹	15	発赤・腫脹	13	蜂窩織炎	24
発熱	12	発熱	10	敗血症	4
腫脹・疼痛	5	排膿	9	扁桃炎	4
腫脹	4	咳嗽・喀痰	4	気管支炎	4
咽頭痛	4	紅斑・疼痛	3	副鼻腔炎	3
咳嗽・喀痰	4	腫脹・疼痛	3	骨髄炎	2
発赤, 腫脹, 疼痛	4	咽頭・扁桃炎	3	Warton管炎	1
膿性鼻汁	2	腫脹	3	肝膿瘍	1
疼痛	2	リンパ節腫脹	2	壊死性筋膜炎	1
全身倦怠感	2	膿性鼻汁	2	化膿性関節炎	1
嚙下痛・困難	2	上顎洞異常陰影	2	気管支拡張症	1
ネコ咬傷	2	潰瘍	3	胸膜炎	1
耳漏	1	紅斑・発赤	2	肺炎	1
体重減少	1	耳漏	1	尿路感染症	1
血痰	1	発赤, 腫脹, 疼痛	4	心内膜炎	1
痙攣	1	上顎洞炎	1	合計	50
喀血	1	咽頭痛	1		
皮膚潰瘍	1	膿栓	1	発生地	例数
発赤・疼痛	1	全身倦怠感	1	東京都	16
嘔吐	1	体重減少	1	北海道	5
胸痛	1	血痰	1	山形県	4
その他	2	瘻孔	1	熊本県	3
合計	69	膿疱	1	高知県	2
		胸痛	1	鹿児島県	2
		ラ音	1	宮崎県	2
		その他	3	和歌山県	2
		合計	77	その他	11

表19. パスツレラ症患者の予後(左), 感染機会(中央), 感染経路(右)

予後	例数	感染機会	例数	感染経路	例数
後遺症無く回復	40	飼いネコ	24	咬傷	23
改善	4	野良ネコ	5	引掻き傷	7
皮膚欠損	2	ネコ	3	爪刺傷	1
瘻孔	1	飼いイヌ	6	口移し	2
関節運動制限	1	イヌ	1	飛沫感染	2
再発	1	不明	11	不明	15
持続感染	1	合計	50	合計	50
合計	50				

表20. ライム病患者の主訴（左）及び初診時主要症状（右）

主訴	例数
他部位の紅斑	16
咬刺部の紅斑	9
発熱	6
皮疹	4
疼痛，筋肉痛	4
顔面神経麻痺	3
全身倦怠	2
脱力，筋力低下	2
感覚異常	2
発赤	1
リンパ節腫脹	1
片麻痺	1
難聴	1
合計	52

主要症状	例数
咬刺部紅斑	9
環状紅斑	6
紅斑	6
浮腫状紅斑	5
発熱・頭痛	4
リンパ節腫脹	4
関節痛	4
発赤	3
感覚異常	3
顔面神経麻痺	3
疼痛，筋肉痛	2
脱力，筋力低下	2
遊走性紅斑	1
浸潤性紅斑	1
全身倦怠	1
髄膜炎	1
感音性難聴	1
合計	56

表21. ライム病患者の病原体（左），投与抗菌薬（中央），発生地（右）

病原体	例数
<i>Borrelia japonic</i>	1
<i>B. burgdorferi</i>	4
<i>B. garinii</i>	8
<i>B. afzelii</i>	1
<i>Borrelia</i>	2
複数種	6
記載なし	7
不明	5

抗菌薬治療	例数
ミノサイクリン	18
テトラサイクリン	3
ドキシサイクリン	3
AMPC	4
他のペニシリン系	5
投薬なし	1
合計	34

発生地	例数
北海道	19
長野県	7
群馬県	3
福岡県	2
静岡県	1
石川県	1
富山県	1

他にプレドニゾロン2例

表22. オウム病患者の主訴（左），初診時主要症状（中央），主な検査（右）

主訴	例数	主要所見	例数	主な検査	例数
発熱	35	発熱	36	CF抗体	27
咳嗽	21	X線肺炎像	30	IgG, IgM, IgA抗	6
全身倦怠感	7	胸部ラ音	17	IgG, IgA抗体	2
呼吸困難	7	呼吸困難	4	IgG, IgM抗体	3
頭痛	3	低酸素血症	4	IgG抗体	5
筋肉痛	3	見当識障害	2	合計	43
咽頭痛	2	不穏状態	1		
食欲不振	2	合計	94		
異常行動	1				
見当識障害	1				
不穏状態	1				
合計	83				

表23. オウム病患者の抗菌薬治療（左），他の治療と予後（中央），感染機会（右）

抗菌薬	例数	他の治療	例数	感染機会	例数
ミノサイクリン	20	挿管・呼吸管理	5	インコ飼育	23
ミノサイクリン+他剤	5	ステロイド ¹ パルス	4	ペット店員	4
他剤→ミノサイクリン	3			ハト飼育	2
クラリスロマイシン	3			野生のハト	2
クラリスロマイシン+他剤	2			他家のインコ	1
他剤→クラリスロマイシン	1			ハト小屋掃除	1
エリスロマイシン	1			サファリーパーク	1
エリスロマイシン+他剤	2			トリ接触なし	2
ドキシサイクリン	1			飼育なし	2
抗菌薬なし	1			合計	38
合計	39				

表24. オウム病患者の患者発生地

発生地	例数	発生地	例数
岡山県	5	長崎県	1
滋賀県	4	奈良県	1
大阪府	4	高知県	1
東京都	4	山口県	1
愛媛県	3	宮崎県	1
岩手県	3	埼玉県	1
福島県	3	その他	5
北海道	2	合計	39

表25. クリプトコッカス症患者の主訴（左），初診時主要症状（中央），基礎疾患（右）

主訴	例数	主要症状	例数	基礎疾患	例数
発熱	8	丘疹・発疹	5	ATL	5
頭痛	5	意識障害	3	HIV感染	4
胸部異常陰影	3	項部硬直	2	SLE	2
全身倦怠感	2	肝脾腫	2	結核	2
皮疹	2	皮膚潰瘍	2	HUS	1
咳嗽	2	紅斑	2	麻疹	1
喀痰	2	髄膜炎	2	腎移植	1
下肢痛	2	心停止	1	ネフローゼ	1
紅斑	2	不全片麻痺	1	C型肝炎	1
痙攣	1	皮下結節	1	B型肝炎	1
下肢浮腫	1	胸部ラ音	1	糖尿病	1
項部痛	1	黄疸	1	重症筋無力症	1
視力障害	1	発熱	1	基礎疾患なし	1
小結節	1	咳嗽	1	合計	22
胸水貯留	1	喀痰	1		
飛蚊症	1	下肢の浮腫	1		
構音障害	1	合計	27		
書字困難	1				
合計	37				

表26. クリプトコッカス症患者の主な検査法（左），投与抗真菌薬（中央），予後（右）

主な検査法	例数	抗真菌薬	例数	予後	例数
抗原検査	8	アンフォテリシンB	11	改善	9
胸部CT	5	フルコザール	16	治療中	3
生検，組織検査	4	フルトシン	4	死亡	8
墨汁法	4	イトラコザール	3	記載なし	2
培養	3	ミコザール	2	合計	22
抗体測定	2	合計	36		
合計	26				

表27. Q熱患者の主訴（左），初診時主要症状（中央），主な検査法（右）

主訴	症例数
発熱	20
倦怠・疲労感	11
咳・痰	8
リンパ節腫脹	1
記載なし	6
合計	46

主要症状	症例数
発熱	15
咳・痰	8
リンパ節腫脹	3
脾腫	3
全身倦怠	3
髄膜炎	2
咽頭発赤	1
嘔気・嘔吐	1
異常なし	1
記載なし	7
合計	44

主な検査法	例数
PCR	19
IgM, IgG抗体	10
IFA-IgM, IgG抗体	6
EIA-IgM, IgG抗体	4
記載なし	5
合計	44

表28. Q熱患者の治療薬（左），動物飼育歴・接触歴（中央），患者発生地（右）

治療薬	例数
ミノサイクリン単独	9
ミノサイクリン+他抗菌薬	7
ミノサイクリン→他剤	2
ニューキノロン系	1
テトラサイクリン系	2
βラクタム系	1
マクロライド類	6
抗菌薬なし	1
記載なし	1
合計	30

動物飼育・接触歴	例数
イヌ	10
ネコ	9
ウシ	2
野鳥	1
飼育歴なし	9
合計	31

抗体陽性のイヌ	3
抗体陽性のネコ	1
PCR陽性のイヌ	1

発生地	例数
静岡県	8
岡山県	4
宮城県	3
北海道	2
秋田県	1
岐阜県	1
東京都	1
記載なし	10
合計	30

表29. Q熱患者の予後

予後	例数
後遺症なく回復	28
慢性呼吸不全	1
死亡	1
合計	30